

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-132	12-017	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
<p>The effect of different alcohol drinking patterns in early to mid pregnancy on the child's intelligence, attention, and executive function.</p> <p>妊娠初期から中期において異なる飲酒パターンが 5 歳児の知能・注意力・実行機能におよぼす影響</p>		
執筆者		
US Kesmodel, J Bertrand, H Støvring, B Skarpness, CH Denny, EL Mortensen, the Lifestyle During Pregnancy Study Group		
掲載誌		
BJOG 2012;119:1180-1190.		
キーワード		
飲酒、注意、短時間大量飲酒、BRIEF、実行機能、知性、小～中等量飲酒		
要 旨		
<p>目的：</p> <p>妊娠早期から中期における母親の週平均アルコール摂取量、短時間大量飲酒が、子供の 5 歳時点での全般的知能・注意・実行機能におよぼす影響を検討する。</p> <p>方法：</p> <p>デンマークの 4 市で 2003-2008 年に神経心理学的試験を受けた女性 1,628 人のコホートとその子供たちを対象とした追跡研究である。妊娠初期の飲酒状況をもとに対象者を抽出した。5 歳の時点で全般的知能、注意力、実行機能のテストを行った。これら 3 つのアウトカムを一つの多変量モデルにて解析を行い、アウトカムとアルコールとの関連の推定値および P 値を計算した。妊娠初期における母親の少～中等量アルコール摂取・短時間大量飲酒は、交絡の可能性を有する様々な因子にて調整した。主要アウトカムの指標として、改訂版 Wechsler Preschool and Primary Scale of Intelligence (WPPSI-R)、the Test of Everyday Attention (TEACH-5) および the Behavior Rating Inventory of Executive Functions (BRIEF) を用いた。</p> <p>結果：</p> <p>多変量解析の結果からは、週平均アルコール摂取量または短時間大量飲酒による（単独あるいは両者を加味した検討でも）統計的に有意な影響は認められなかった。上記のどのアウトカムにおいてもこの結果は同様であった。</p> <p>結論：</p> <p>本研究の結果は、妊娠期における小～中等量アルコール摂取および短時間大量飲酒を扱う将来の研究に統合・加味すべき方法論・統計学上の包括的アプローチに寄与するものである。現在、妊娠中の安全なアルコール摂取量として確立されたものは存在せず、最も保守的な観点から、妊娠中の女性はアルコール摂取を控えることが推奨されている。しかし、本研究結果からは、少量のアルコールをときおり摂取することに（子供への知的影響という観点からは）大きな心配はないであろうことが示唆された。</p>		